



「中将棋・八十六才」銘 墨書

## 水無瀬駒 (みなせごま)

水無瀬神宮の宮司を務める水無瀬家には、約400年間伝わる「水無瀬駒」があります。

「水無瀬駒」は水無瀬家で作られた将棋駒の呼び方で、安土桃山時代の公家で能筆であった水無瀬兼成<sup>かねなり</sup> (1514-1602) が駒の銘(文字)を書き、八十九歳で亡くなるまでに700組以上もの将棋駒を制作しています。駒の高級材質で知られる黄楊で作られ、作者と制作年が特定できる最古の将棋駒ともいわれ、江戸時代には

『将棋駒の銘は水無瀬家の筆を以って宝とす。

この筆跡の駒、免許なきもの弄すべからず』

とまで言われました。

讓渡<sup>じょうとさき</sup>先には天皇(後陽成<sup>ごようぜい</sup>天皇)、関白(豊臣<sup>かんぱく</sup>秀次)、前將軍(足利<sup>あしかがよしあき</sup>義昭)、公家、大名、高名な武將など、徳川家康には53組もの駒が納められました。先が細く薄く、手前が肉厚幅広な現在の駒の形は兼成が確立させ、以後、高級な駒の形はこれに倣っています。

水無瀬家には兼成作の将棋駒は、小将棋「八十二才」銘漆書、中将棋「八十六才」銘墨書、中将棋(残欠4枚)漆書が残っており、平成21年4月に「水無瀬駒 関連資料」として島本町指定文化財第1号を指定しました。



「象戯圖」(二卷)

象戯圖 (しょうぎず)

水無瀬駒の関連資料として、水無瀬家には「象戯圖」(二卷)が伝えられています。

「象戯圖」は京都にある天台宗 <sup>まんしゅいんのみや</sup>曼殊院宮が所持していた「象戯種々之図」(1443年に筆写された)をもとに、150年後に兼成がもう一度筆写した巻物で、巻の最後に

『天正在壬辰清和下澣 <sup>ひつしや</sup>権中納言兼成 <sup>じゅきん</sup>壽算七十九』

【天正壬辰(1592年)4月の終わり、権中納言兼成79歳】

と署名があり、関白秀次公の <sup>けんめい</sup>堅命により、大々象戯・大象戯の両面を写したこと、これは <sup>きだい</sup>希代の <sup>めいよ</sup>名誉であると記されています。

このように、「象戯圖」も安土桃山時代に高い位をもった人物が筆写し、それが現在にも伝えられているという点で一級資料といえます。巻の中には15世紀に6種類の将棋が存在したこと、将棋の初期配置、表と裏の文字、駒の進め方をなどが図面で示されており、将棋の <sup>さ</sup>指し方を知る最古の資料です。将棋を好んだ関白秀次と、駒の制作者である兼成とのつながりを示す資料としても貴重です。

「象戯圖」も平成21年4月に「水無瀬駒 関連資料」として島本町指定文化財第1号となりました。